

サインと 景観

第8回

高橋芳文

広告景観研究所 所長
興和サイン株式会社 代表取締役
特定非営利活動法人 ストリートデザイン研究機構 理事長

日本の都市景観には統一感がない。 だから、都市と屋外広告物を “調和” させることはできない。

今回ご登場願った明治大学国際日本学部の小笠原泰教授は、米国シカゴ大学大学院で国際政治経済学及び経営学を学び、マッキンゼー&カンパニー、カーギル社ミネアポリス本社・オランダ・イギリス法人を経てNTTデータ経営研究所に勤務した経歴を持つ。現在は、社会生態学の観点からのグローバリゼーション及び文化・産業政策としてのクールジャパンなどを研究テーマとしている。日本の諸文化に精通し、かつ外国人の視点からでも日本を分析できる同教授に、外国人の視点で見た日本の景観、欧米と日本の景観の違いなどについて話を聞いた。(構成：編集部)

外国人から見た景観を考えるとときに抑えておくべきこと

高橋 ボクが活動する広告景観研究所とストリートデザイン研究機構では、都市景観を考えるセミナーなど展開しています。これまでのディスカッションを振り返ると、“外国人観光客から見た景観”と

いう視点が欠落していました。小笠原先生は様々なグローバルカンパニーでご活躍された経験があるのでお聞きします。外国人から見た日本の景観とは、どのようなものなのですか？

小笠原 これは簡単に言えることではありません。まず外国人といっても、アジアの人々と欧米の人々に大きく分けられます。中国、韓国、台湾、マレーシア、インドネシアなどから来るアジア人と欧米人では、日本の景観に対する感じ方がまったく異なると思います。

アジア人は、おそらく、日本の都市の景観を気にしていません。それは、アジア諸国では、計画都市国家であるシンガポールなどの一部を除いて、アジア的カオスとも言われるように、景観が整っているとは言えないことからわかります。一方、ヨーロッパには景観の整った都市が数多くあり、その維持に多くのエネルギーを注いでいます。このように、景観に対する考え方がまったく異なる両者を、“外国人”とひとくくりにして語る

ことはできないのです。

日本にやって来る観光客の数は、欧米よりもアジアからのほうが圧倒的に多いのが実情です。多くのアジア人は、日本の都市景観よりも温泉、お祭、富士山などの自然、和食などを好みます。彼らにとって日本の都市の景観がどうであるかということは、強い興味の対象ではないのではないのでしょうか。

かたや欧米人は、京都や築地などに強い興味を示す一方で、銀座、新宿、渋谷、六本木など深夜でも人がたくさんいて賑やかな繁華街にも興味を示します。アメリカなどは、自動車社会であり、治安が悪いこともあります。日本のように同僚と夜に飲み歩くといい習慣もあまりありませんから、日本では夜の街に強い印象を受けるようです。特にネオンに対して強い印象を持つようです。そして、日本人は寡黙で真面目で、高品質なモノづくりを整然と行うと思っていたのに、大都市の繁華街のこの猥雑さは何だ!?!とギャップに驚いたり、楽しんだりしているのかもしれない。

アジア人も欧米人も秋葉原には行きます。アジア人は秋葉原で買い物するのが旅行の目的のひとつになっています。しかし欧米人は、そこに売っている物にはあまり興味を示さず、街の風景、というか、雰囲気を楽しんでいるようです。おそらく多くの欧米人はすでに豊かですから、物にはあまり関心がないというのも一因でしょうが、景観に対する意識の問題が根底にあるように思います。

ですから“外国人から見た景観”を語るなら欧米人が対象になってくるのですが、外国人のボリュームとしては、アジア人が多いということを念頭に置いておく必要があります。

“調和”には統一感があり “共存”は異質性を前提にしている

高橋 なるほど。それは重要なことですね。日本の都市は景観が整っている欧米とは

違い、統一感のない雑多な感じなのに、屋外広告物行政はアメリカの制度を真似たりして、結構厳しいところもあります。

小笠原 そうですね。でも日本人にはもともと“公共”という意識が薄いですよ。戦後の日本は個人の権利は強く尊重してきましたが、いつの間にか“公共”においては個人の権利がある程度規制される”という民主主義の前提を意識することもなくなってしまいました。

高橋 日本の屋外広告物条例には“屋外広告物は地域に調和するべき”といった感じで“調和”という言葉が出てきます。しかしこれとは別に“屋外広告物は都市と共存するもの”という考え方もあります。

ボクとしては“調和”よりも“共存”だと思っています。先生は調和と共存をどうお考えですか？

小笠原 “調和”は、おそらくヨーロッパ的な考え方なのだと思います。調和という言葉には、集団に共有された統一感、全体感が先に存在します。しかし、“共存”は異質性を前提にしています。前者はデザインできますが、後者はデザインできません。決定的な違いですが、条例を作る際にはそこまで言葉を定義しないで“調和”と言っているのでしょうか。“共存”は、相互了解なので、一方的に、全ての異質性を認めるわけでないことを留意する必要があります。

例えば、パリやドイツのローテンブルクなど、景観に統一感のある街なら、“屋外広告物を都市と調和させろ”と言うのも解ります。

しかし、日本の都市の多くは戦後の焼け跡にバラックを作り、そのあとにビルが乱立し、現在の姿になっています。もともと統一感も何もないところで“調和しろ”といっても、何に調和させたら良いのか解りません。統一感、全体感がないにもかかわらず、それがあって仮定して、それに合わせろと言うのは無理です。

トルッロで有名なイタリアのプーリア州のアルベロベッロは、その自然と歴史的背景と土地にある石灰石を使って家を建ててきたので、自然とマジョリティが形成されて、統一感のある景観になりました。そこに異分子を入れられないことが調和です。しかし、日本の景観にはそもそもマジョリティがないので、法令は単に「あまり変なことをするな」と言っているに過ぎません。あるのは、せいぜい街並み程度ですね。

しかし“共存”というのも難しいのです。何をもって共存と言えるのか？ 異質な物がそこにあるから、それで“共存している”と言えるものでもありません。結果的に、異質な物が存在する景観を“これが特色だ”“それで、いいんじゃない”と感じてもらえないのかもしれない。しかし、そう言って、価値を評価してくれる人が1人では、困ってしまうわけです。

高橋 ボクはその“いいんじゃない”があちこちの地域で増えていくことによって、各地域の魅力を高められると考えています。現行の屋外広告物の規制を適用除外とするかたちで、町や商店街などの単位で独自のルールを作り、“これがこの地域の特色だ”と言えるような“共存”を目指して合意形成を図るべきです。そういうプロセスを経て自分たちの街の景観を良くしていこうとする動きは今までになかったもので、それを実現したいのです。



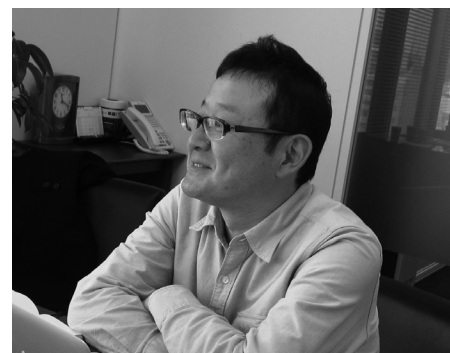
【取材協力】 明治大学国際日本学部 小笠原泰教授
東京大学文学部卒、シカゴ大学社会科学大学院・同経営学大学院卒。多数のグローバル企業を経て、2009年4月から現職。

小笠原 おっしゃる通り、そのような地域単位での了解が、これからは必要なことだと思えます。逆に、調和しようとするれば、そもそものコンセプトがないので、一つひとつの建築やサインは特色がなくなってしまうでしょう。しかし、現状の屋外広告物法では、その方向に向かってしまいます。

高橋 京都なんかは、まさにそれをやっています。

小笠原 京都は例外で、京都の強いイメージがあるので「そんなところにビルを建てるのは良くない」と言えます。でも、何年も後になってみないと、今やっているビル建設が、景観上、意味のあることなのかどうか、本当は、わかりませんよね。とにかく京都は、昔の景観を守ること以外で調和することはできないような気がします。ここが、パリとは違うところでしょうか。

京都以外の商店街や自治体で、明確な独自色のある統一感・全体観もないままに、無理に調和を押し進めて、その結果一つひとつの店舗や看板が目立たなくなり、ひいては全体が無個性となり、結果埋もれてしまっただけでは意味がありません。景観を構成する店舗や看板などそれぞれのピースが自己主張しているけれど、「それは、アクセントであり、全体としてそれほどグチャグチャな景観にはなっていないよねと、それが共存だ」という方向



広告景観研究所の高橋芳文所長。2013年4月から法政大学大学院後期博士課程に在学中。

で進めるしかないではないでしょうか。

高橋 京都や川越のような特色を出そうとしても、ほとんどの地域でそんなことはできません。それなのに、無理して何か特色を出そうしているケースが多いのです。そうではなくて、今、先生がおっしゃったような共存を目指す方法もあるのだと、ボクは行政の方々にも伝えていきたいのです。

小笠原 それにしても景観っていうのはやっぱり、そこで暮らしている人と、外からやって来る人では求めることが違います。そこに外国人観光客まで加えると、一層やっぱりなってきます（笑）。

高橋 過去にボクの地元の中野で、一般市民の参加者を募って議論したのですが、中野の街に観光客を呼びたい人と、観光客なんていらないうる人がいます。どちらが正しい、正しくないとは言えません。でも意見の異なる人が対話す



日本にやってくる欧米人は、日本の街が深夜でも賑やかなことに強い関心を示す。写真は新宿歌舞伎町。



銀座四丁目交差点。屋上広告塔などの移り変わりがあっても、ひと目で銀座四丁目と判るほど景観が確立している。

ることは、景観を考える上でとても重要だと思うのです。

ノイズがなければ都市はつまらない

高橋 先生が、日本で景観を評価できる街はどこですか？

小笠原 日本で唯一“調和”があれば丸の内だと思います。あそこは三菱地所が前もって強い統一感・全体観を持って再開発しています。ただ、あの調和している風景を気持ち良いと感じるか、気持ちが良くないと感じるか、皆さんはどうなのでしょう？

高橋 ボクは気持ち良いとは思いませんね。他に先生が、景観を好きだと思える街はどこですか？

小笠原 銀座4丁目交差点のあたりは、ずっと変わらないですよ。三愛ビルの



小笠原教授が日本で唯一調和していると評価した東京丸の内街並。整っているが、ノイズがなく面白みに欠けるとも言える。



原宿の竹下通りも、ひと目で竹下通りと判るほど特徴のある景観だ。

上の広告塔が変わったりしますが、和光、三越があり、多少は変わっているのだけどパッと見て銀座4丁目と判る。それは立派なことだと思いますが、私個人が好きな景観なのかと言われると、ちょっと迷いますね。

あとは原宿の竹下通りも、中身は変わっているけどひと目で竹下通りとわかる。そういうのが立派な景観なのだと思います。

私としては、あまり変わらないビッグボックスに代表される高田馬場駅前の、池袋とは違った、何とも言いえない、無秩序な雰囲気も面白いと思います。

高橋 ボクは看板屋でもあり、看板って都市のノイズかもしれないと思います。でもノイズがなかったら都市はつまらないと思うのです。

小笠原 その通りです。だから丸の内はつまらないのかもしれないですね。あそこは本当にノイズがないですから。しかし、東京駅の反対側の八重洲には、所どころキレイなビルがあるのに、よくわからない潰れそうな店舗や細い路地があったりして、ノイズがあります。また、品川の港南口には、火事になったらお終いと言えそうな、狭い路地に飲み屋が並んでいる一角があります。ああいったノイズをどう残し、それをどう見るかが重要です。

高橋 ノイズは屋外広告物条例などでは絶対に作れません。地域協定などのルールで、今あるノイズをどう残すのか議論していく必要があります。

小笠原 そうですね。高橋さんの地元の中野も、ノイズだらけの街ですね。そのノイズを排除しようとするのは大きな間違いだと思います。いろんなノイズがあるから、みんなが暮らしやすいのであって、それをキレイに区画整理してはダメだと思います。（了）